京城新聞

漫言　不言生

十字架

苦みと樂みとを連想するものは金錢なり苦みと樂みとを連想するものは基督教徒が十字架に於けるの感想なり十字架は基督教徒の慰安なり十字架は基督教徒の生命なり基督教と十字架とは決して分離すべからざるなり主がポンテヲピラトの時十字架上につけられしを聞かば吾人の心神頓みに蘇生の樂みを以て滿たさるゝも之れと倶に我等亦其の如く十字架を負はざるべからざるの義務を有すと聞かば苦みを感せざる可からず見よや此世は基督教徒にあらざるも十字架を負はざる可からざることを、故に吾人は萬事萬端十字架の苦みを先きにして已れ自ら……

自力他力

五億萬の佛教徒が精神界の修養は自力と他力とにあり即ち聖道と淨土との二門にあり聖道門とは智者學者等が修業する門にして若し智識を愛するものが十信十行の始より等覺に至るまで修業するの門を云ふなり淨土門とは氣根劣等の凡夫が唯だ仰で彌陀の本願を信ずるものをこそ云ふなれ大凡佛教には此二門あるが故へに一切の人類を網羅して漏すことなきなり而して此二門異なると雖も究極する處皆一に歸するなり彼の世人が常に口にするわけのぼる麓ど のみちは多けれどをなし高嶺の月をながめんと能も此意を云ひあらわせるものかな而して其一に歸するとは無我の一に歸することを云ふなれ

惟神

信仰個條の設けあるものは宗教なり神道には惟神の二字あるのみにして信仰個條なし故に宗教にあらざるなり所謂惟神とは、カミナガラにして人意のさかしらをやめて神のまにまに從ふの意なり即ち自然の法則に從ふなり既に自然の法則に從ふものなるが故に苟も此世に存在するもの一も惟神ならざるなし亡ふも惟神なり興るも惟神なり神仰個條を設くる宗教も亦た惟神の一ならざる可からず嗚呼惟神二字亦た深廣且大なるかな

浮世ぐさ

●斬髪の始

府下四民を合して七分半半髪三分斬髪商人職人の斬髪日に多し途中倘半髪羽織刀帶袴の者あり婦人の斬髪大に減ずとあり随分混雜の時代といふべきなり

六年三月廿日　天皇陛下命じて頭髪を斬らしめ給ひしかば庶民倘一層急激に其風になびきしことなるべし次に抄錄する所は都下髪樣の一班を知るに足るべし

七年三月版問答前編の下にこの頃世間の風俗を見るに家作を西洋風に作りかへ頭は散切にて身体には窄袖細袴を纒ひ云々といひ同十月版繁昌記に一個禿棒頭圓如ニ王䕫花……婦而不制ㇾ眉曰ㇾ開化……晩近有ニ一種形者ㇾ剃ニ前髪與ニ中髪ㇾ而存ニ其餘髪ㇾ恰如ニ箍形ㇾ因循與ニ開化ㇾ戰ニ於一頭上ㇾ各之可ㇾ謂ニ半開頭ㇾ乎といひ同六月版繁昌誌に俗に正敬的と云はるゝ者は頭髪多く鬢あり大腕孔と云はるゝ者は頭髪悉皆河童に似たり

（○文苑一）

思出の記　大庭生

戀人

死せる者よ、喚べばとて歸るにあらず、叫べばとて應するにもあらざれど、忘じ難きは戀人の面影ぞ。

曾て日比谷公園の月の夜半、露に露にし萩花の傍に、虫の鳴く音を聞きつゝ戀を語りし時よ、……なく、……たる春風に彷徨へるに似たりき。

くして、……

あゝされど世事轉變多くして計るべからずとかや、あはれ我が戀人、天運拙なく幽冥界を異にしてより、今此處に三歳の秋は來りぬ。

あゝ戀人よわれ、君と別れしろの日より我は常に春の草木の香はしき野邊より、秋の木枯し荒ぶ淋しき深山に在るの思ひなせるなり、切めてもの憂き晴らしにと、靑山の墓頭、撞く鐘の音寂しき夕まぐれ、君が墓標に花を手向けて、天帝の無情を慟哭し幾度を度さはさりながら戀人よ、われ斯く遠く隔りては、誰かまた君が爲めに手向するものぞ、アヽ我千々に思ふ心の任せざるを如何にせん、戀人よサテも無情き君よなと恨み給ふを止めよ。

書懐　孤山小史

卅年煙雨濛々過。層樓呼酒爲消愁。千年夢境非耶是。一滴雞林第八州。惡詩未成帙。反哺本親果何日。塵中自笑一乳兒。疎狂暇學處世術。醉餘依例獨破顔。復奥暮山不怯寒。

仲秋無月

斜日楚々美人何在哉。千門萬戸窓悉開。已酉若惜別。蒼然暮色次第來。正値仲秋三五夜。滿樓素琴小宴催。瓢薬向明義井墜。涼笛自焚山淺吹。閑吟靜踏鑾韵去。導識露秋風移徘徊。回看半生逃名客。品坐把杯死餅笑謫策。去歳偶然省家山。詩酒徹遂背盡是今夕。茫漠未悔入雞林。誰知倚門慈親心。詩酒徹遂背盡。千里鄕天或朗霧。對月惹起兒淹滯。鶴首相顧話歸期。別離參商嘆浮世。明鏡未上奇案荒。龍顚虎倒互跳梁。須臾痴雲天如墨。四圍暗澹雁聲長。

漢江避暑

一葉搖々水面亭。縱從廬岸向翠汀。白鷗以外數峯靑。回時秋澄々。　手夢

俳句

白露集（一）

あさ寒く草に秋ありきり〳〵す　三瓢
柴折門きりたら〳〵　可醉
名月や老若嬉戯す橋の上　同

垣下の庭一ぱいの糸瓜かな　可醉
庵のひて隣の軒に糸瓜かな　櫻水
糸瓜やくづれかゝりし軒や垣　湖東
小鳥來て木の葉散すや秋の暮　同
草苅の娘戻るや秋の暮　可醉

五月闇（十九）　柳葉川合

「どうも御無沙汰しました、大層の暑になりましたが御變りも無て御壯健で存ます。」

丁寧に叩頭をするは山川孤山である。

「大層久し振だつたね、何時會つてから……ではないかしら。」

云ふは御室雅數である。

「左樣で御座います、確かあの五月の雨の日に御目通り致したきりかと心得ます。」

「するとモウ二ケ月以上になるね。」

「御意にございます。」

「ウム然う〳〵あれから逢はない、會はない、會つたら云つて遣らうと思ふて居つたが、あの晩到頭汽車に乘遲れて歩行で歸つたと云ふではないか、だから一泊して朝に爲ろと云つたのだ、道が惡くつて困つたぢやろう。」

「いやどうも彼の晩ばかりは眞個往生致しました、宜い心地に醉ひが廻りましたので蹣々と謠かなんか唸りながら停車場に往きますと、モウ半町と云ふ所でビユーと笛を鳴らして發車する所なんでございます、吃驚して驅け出しましたが、自分で可笑くなら……

……途方に暮れまして、引返して御厄介にならうかと存じましたが、あんまり意氣地の無い話ですから、幸ひ雨も止むで居りました故、寧そテク〳〵歩行つて歸らうと覺悟致しまして、繪にも描けない姿になりまして、尻を端折つて出掛ましたが、伏見まで歸りますと、又點々と降つて參りまして、道は全然深田の如く宅へ歸りますと、東雲が白むのと一時でございました、イヤどうも那樣拙劣な事は生れて始めてゞございました。」

「ハヽヽそれは隨分酷いめに逢つたわ、外はどうだ隨分暑いだろう、サア先づ羽織を脱いでは奈何だそして、此の椽側に出ると少しは風があつて涼しいやうだ。」

「では失禮ですが御免を蒙りまして……。」

云ひつゝ絽帷子の上に着た紗の羽織を脱いで、袖疊みにして片隅に寄た、腰なる扇子を取り出して靜かに風を呼ぶ。

雅數は上布の上に白縮緬の扱帶を締め、小豆色の蒲團の上に坐し、岐阜製の水團扇を使つて居る。

「時に手紙は屆いたかね。」

雅數が問へば、

「ハイ確に屆きまして拜見致しました、それゆゑ暑中の御見舞旁伺ひましてございます、まだ何日頃とも確と分りませんでございますか。」

「イヤ大抵分つて居るのぢや、今月の二十五日に東京を出發て、京都に二十八日に着くと云ふ報知なんだ。」

「二十八日に……シテ宿は何方でございます。」

「宿は何時でも東山の中村樓と極つてるから、今度も多分彼處だらうと思つて居る。」

京城新報

協約功勞行賞
世人の嗤笑を招くのみ

日韓協約に就て統監府員に論功行賞あるべしとは久しき以前に傳說せられたり、當時余輩は何が爲め論功行賞なるやを訝りしが當局者に質する所あり、然るに其後伊藤公の說として傳ふる所に依れば「日く協約締結は余の當せる所なり何人か之に與らんや、若し功を賞すれば余一人のみ云々」と、果して伊藤公が斯く言はれたるや否やは知る所に非ざるも、伊藤公の性格として或は斯く言明せられたりと思はれざるにあらず、其後傳ふる說に依れば統監府員の論功行賞はなかるべしとの事なり、當局者或は余輩の警告に顧る所ありしやと密かに喜びたり、日韓協約に於ける論功行賞は全く沒止せられたるものと世人は推斷したるなり、然るに一年有余を經過したる今日突然にも協約功勞の行賞は發表せられたり、發表せられたるものは僅少なれども、事の順序として行賞せらるゝものは之に止らざるべし、余輩は伊藤公の說とは異なれども此等の論功行賞が甚だ無意味のものたるを感ずるなり、抑も日韓協約なるものは何人の力に依りて締結されたる乎、余輩と雖も日韓協約の締結を以て功なしとは思はざるなり、第二協約の如きは慥に帝國の保護權を鮮明にし、其保護權行使に於て更に一歩を進めたるものなることを識認するに躊躇せず、然れども之が締結の功勞は果して統監府員にありや否やは疑問なり、余輩は其主動者たる伊藤統監の功勞なるやをも疑問とせざるを得ず、況や其他の吏員をや、余輩は伊藤統監が協約締結の任に當りたるを知る、其協約に記名調印せられたるを知る、然れども締結の任に當りたることと、記名調印したることゝを以て直に協約締結に功勞ありとするは甚だ大早計たるを知らざる可らず、之を判定するには當時に於ける大勢と裏面の事情とに就て研究せざる可らず、第二協約締結をなしたる動機は那邊にありし乎、列國の大勢及び裏面の事情は更に進展したる協約を呈出するも意の如くに締結せらるべきに非ずや、斯る簡易なる協約ならば伊藤公爵に非ざるも、何人が締結に當るも之を爲し得べきに非ずや、余輩が此疑義を發するは決して故なきに非ず、當時の大勢を知り事情に通ずるもの必ずや余輩の言に首肯するならん、而して日韓協約に於ける功勞を推さんとせば、我が勇敢なる駐劄軍を度外視す可らず、當時軍隊なかりしと假定せば如何、何人と雖も其成功を推測するに難からざらんや、是非共論功行賞をなさんとならば、須らく慎重なる調査をなし、徒に世人の嗤笑を受くるが如きことなからんことを切に勸告するものなり

對星樓茶話

△最近韓國に於て最も著しきもの三ツあり、第一は韓國に於ける米國教會の經營せる手藝教育事業の着手也、第二は平安地方人民の新教育の勃興也、第三は全羅地方に於ける蠶業の增加なり。

△鴨綠江貿易は國境稅關の設立により必ず衰退すべしとの豫告は吾人曾て公にしたり、果して事實となれるを見るに至れり、鴨綠江問題は尤も趣味ある問題也、日淸韓三國人の殖民的能力を試驗すべき好箇の場所なり。

△百濟は南人の文明を傳へ、新羅は北人の文化を傳へ、高麗は南北の文化を半島化し、李朝は之を繼承して衰亡せり。

△朝鮮統監の地位は對韓政策の浮沈場なり。

△古昔より南滿州より南下したる民族に係大なる事蹟を殘したる無く、北滿州より南下したる民族は弱小なる民族無し。

△有力なる民撰民長論は在留邦人の自尊自信より有力なるはなし、此自尊的信念は母國の海外政治中尤も敬重すべき信念なり、殖民史中尤も有力なる信念なり。

△韓人間に起れる近來の社會問題中兩班と常民の利害背戾しつゝあることは帝國の保護政治中誇るべき特點なりとす、而かも保護政治者自らは了解せずしてあり。

△朝鮮人の新聞紙は一面より三面まで悉く衣冠束帶的なり。

△京城の湯屋は日韓人の混浴を許さず、之れ伊藤統監の方針に反するものなり。

東京電報

▲荒井次官の着京

荒井度支部次官は本日大磯に伊藤統監を訪問し本夜着京の由(十八日發)

▲行賞費の計上

韓國暴徒鎭定に從事せる各隊の論功行賞の經費二百萬圓を來年度豫算に計上せられたり(十八日發)

各地電報

▲巡査の遭難

成川警察署三登巡在駐在所詰巡査千葉幸太郎氏は家族を引纏め成川に歸る途中本日午後四時江東郡「バクテン」にて暴徒八名に遭ひ妻は即死し千葉巡査は負傷せり(十七日平壤發)

雜報

●著作權の保護

韓國に於ける工業所有權及著作權保護に關する日米條約及之に伴ふ各關係法規は去八月十六日より實施せられ其管轄官廳にして統監府に特許局設置せられてより韓國に於ては工業所有權及著作權保護制度の創設を見るに至りしは元と日米兩國間の條約に基きしものにして米國は韓國に於て工業所有權及著作權保護に關しては治外法權を撤去し且つ米國に於て韓國人にも米國人同樣に是等權利の保護を享有せしむるべく日本國は內地に於けると同樣の法令を韓國に施行して日米韓三國民の發明意匠商標及著作物を韓國に於て保護すべきことを約したるに起因するものなるが故に其保護を享くべき者の範圍は自ら日韓米の三國民に限らるべきは當然の事なりとす韓國特許令其他各令には何れも本令は日韓兩國の臣民に對し發明意匠商標又は著作物に付同樣の保護を與へ且つ韓國に於て是等保護に關し治外法權を行使せざる國の臣民及人民にも之を適用すと規定したるも米國以外の諸外國にして未だ該條件を具備したるものなきを以て其適用を受くべきもの目下に於て米國人以外には之なきなり之がため居留の諸外國人間に商標に關し[illegible]の穩となれるが如きも日米條約及其關係法規の趣旨充分に徹底せらるるが爲ならん諸外國人の苦情は自己の商標につき其保護なきが爲め日本人により直に盜用登錄せらるべきものと云ふにあるが如きも商標法第二條には世人を欺瞞するの虞ある商標は之を登錄せざる旨を規定しあるを以て日本人の出願商標と雖も例へば其商標に不實の事項を記載し或は他人の製品なるが如く假裝したる商標の如きは一般購買者保護の爲め登錄せらるべき限りにあらざるを以て世人の疑ふ如く政府が法律を盾に不道德なる商人を助けて之を保護するが如きことなきは素より論を待たず(未完)

●坤元節の祝賀

本日は坤元節(韓后誕生日)に就き宮中にては謁見等の儀式は擧行せられざるも總理大臣其の他各大臣以下勅任官以上約九十名に正午韓料理の賜饌あり其の他の高等官は前例により宮中にて祇候名簿に署名せしむと云ふ

●內閣更迭の訛傳

一昨日韓國內閣更迭し金允植總理大臣となり俞吉濬內部、張博法部、李俊鎔宮內大臣其他趙義淵以下亡命者團の重立たるものを以て新內閣を組織すべし爲に同夜開くべき筈なりし內閣會議も中止されたりとの說如何にも事實らしく傳はりしかば之を聞きたる人々は何れも奇異の感を生じ當路者に就き問合せし人もありしが現內閣に於ては一向に其傾きも見へず平常の如く執務し却つて其說を笑ひ居りたるが之れ何等かの爲めにするものゝ訛傳せしものなるべし

●許爲の死刑宣告

憲兵隊に於て捕縛せられたる賊の首魁許爲は京城憲兵分遣隊にて其大体を取調べ之を有罪と認め其裁判を控訴院に移したるが同院に於ては昨日公判の結果死刑に處すべしと宣告せられたり之れに對し許爲は更に上告等の意思なきも彼が子女及び親族等は大審院に上告せんと目下相談中なりと

●內部廳舍の建築

現內部廳舍前に新廳舍を建築する事は曩に報道したるが今回稍々其の設計を經り近々着手する筈にて其の建坪は二百四十坪二階建なりと

●暴徒歸順に就て

暴徒の歸順に關しては詔勅を以て十月三十一日限り之を許さざるを以て眞正に前非を悔悟し免罪を乞ふものは十月三十一日迄に歸順を出願すべし若し期日以后に自首するものあるも夫々國法に基き處斷せらるべし

●第三回梁起鐸公判(續)

●證人ベッセルの訊問

(長)被告曰く證人は一萬圓をマーテンに貸與せりと被告に語りたる事ありと然るか

(べ)余は貸す前に於て梁に語りたる事あるも後で[illegible]貸與したる事を語りたる事なし

(長)利子を得て總合所の經費に充つる爲め一万圓をマーテンに貸さんと被告に語りしに非ざるか

(べ)其の事ありきマーテンに貸したるは利息を得んがためなりしなり

(長)五千圓に對し幾何の利子なるか

(べ)利子は受取りたる事なきも年九歩の約束なりき

(長)五千圓は新聞社に於て集めたる金か或は總合所の金か

(べ)總合所のものなり

裁判長は此れに對し「尹雄烈は右の金は新聞社に集りたるものなりと述べたり如何」と問ひベッセルは「尹は知らざるなり」と答へ訊問は金礦會社株の件に移れり

(長)金礦會社株を買ふに上海香港銀行の預金を出せりと云ふ如何

(べ)然り

(長)其の株を買ひたる理由如何

(べ)第一其の金を韓國に於ける事業に下して有益に利用するため第二に株を買入るゝ方が預金よりも利廻り良しと信じたるためにして此の事に關しては梁は何事も知らず報償會長たる尹及朴等と相談せし結果なり

裁判長の訊問は再びマーテンとの關係に返れり

(長)マーテンへの貸金に對し擔保を取りしか

(べ)何物も擔保物を取らず只手形のみ

(長)返濟に關して如何に契約せしか

(べ)初めは十八ヶ月間据置の約束にて貸したるも後約束を更めて一ヶ月五百圓の月賦返濟となせり

(長)利子を受取りしか

(べ)受取らず

(長)預金利子は受取りたりや

(べ)コールブランボストウイック銀行への預金利子は受取らず帳簿にて計算せり

(長)利子の計算書ありや

(べ)なし

(長)世界に信用ある銀行又は會社に預金すべしと廣告したる報償金は斯如にして一旅館の主人たる佛人マーテンに貸與され而かも利子の計算書無しと云ふが如き其の無責任[illegible]くの外なし

裁判長は以上にて其の訊問を終り檢事に對し尚證人より聞取るべき事ありやを問ふ伊藤檢事は口を開けり

(檢)被告人は總合所にては如何なる地位にありしか

(べ)梁は總合所の檢査係又は計算係なりしと記憶す私は總合所とは公の關係なかりしなれば私の信ずる所を述ぶるのみ

(檢)念のために問ふ證人は總合所にては如何なる地位に在りしか

(べ)私は其の名譽職にて其職名の何たるやは知らず一回も總合所に行きたる事なし

此の曖昧なる答辯に對し檢事は急所を衝けり

(檢)先刻證人が裁判長に對する答に總合所の金を自由にしたりと然らば證人は總合所に於て重要なる地位に在りし如し如何

(べ)私が色々の事に勝手に使用するを得たるに非ず單に三万圓を自由になし得たるなりこは彼等より小切手にて受取りたればなり其の他には關係なし

(檢)上海香港銀行に三万圓預金したるは利子の高きを以てなりと云ふ然るに預金するや直ちに引出したるは如何此の短期間に株を買ふに意見の變じたる理由如何

(べ)株を買ふ話は昨年十二月に始まり本年一月に入り尹其の他の者と相談し四月七日に至り預金をなし直ちに引出して株を買ひたり

(檢)其の預けて直ちに引出したる理由如何

(未完)

●黃海々戰紀念會

豫報の如く一昨日午後二時より千早艦上に於て黃海々戰紀念祝賀會を催されたるが來賓は官民新聞記者二十餘名にて一同宮丸辰丸の二隻に分乘し軍艦に至るや艦長を初め將卒一同は甲板に出迎へられたるが甲板上には一面天幕を張り將卒の手になる飾りは全艦に施され壯麗言はん方なく午後三時より餘興として水雷砲擊演習を行ひ終りて上甲板に於て立食の宴に移り席上水兵の演藝等あり非常の盛況を極めて一同軍艦を辭したるは午後七時頃なりき

●關稅鑑定價格交涉

仁川稅關に於ける鑑定不當問題即ち下駄類未製品の鑑定價格變更の件及一時仁川輸入商を騷せし消火器を有稅品と見做したるに就き仁川商業會議所より交涉する筈なりしも未だ表向きの交涉あらざりしを以て本日萩谷書記長は午前仁川稅關に宮本關長を訪ひ交涉をなしたる筈なり

●農工銀行支配人會議

度支部は本月廿五日より各地農工銀行本店支配人を召集し營業に關する諸種問題の會議をなす會場は漢湖農工銀行樓上にして廿八日よりは農工銀行技師を參與せしめ月末迄に終了する豫定なりと云ふ

●公衆電報取扱驛增設

京仁線梧峴、京義線一山、雞井の三停車場に於て來る廿一日より公衆電報(和文に限る)の取扱を開始する事になれり梧峴の如きは京城との取引最も頻繁なるを以て當事者に取りては定めし便利なるべし

●民團徵稅成績

第二期京城民團徵稅は第一期徵稅より收金額り大に好成績なりしと

●京義沿線の商工業(續き)

小川農商工部事務官談

△新義州の不景氣　京義鐵道の終點たる新義州は南釜山に對して韓國の北門なりと呼ぶものあるも其の現時の不景氣は誠に甚しきものにて日本人人口の如き千二三百と稱するも實際は七百餘に過ぎず京義鐵道の終點として其の不振驚くの外なし蓋し此の地は此の地方物資運輸の大通路たる鴨綠江畔に位するも河流の關係上最惡の地點にして沿岸は年々砂礫に埋められて舟楫の不便を來し殊に古來洪水の虞ありと稱せられて韓人の來り住む者無く加ふるに倉庫なく銀行無く(曾て五十八銀行出張所を設けたるも今は引揚げたり)從て此の地に於て商業を營まんとするも補助機關を缺げるを以て此の地方に於て商取引をなさんとする者は何れも此等の機關の備れる對岸安東縣に店舖を設け韓國より輸出する穀類の如きジャンクにて鴨綠江を下るものは何れも此の地に集らずして安東縣に運ばれ二重の稅金を支拂ひ居れり(安東縣にてはジャンクにて鴨綠江を下り陸揚する貨物には淸國官憲輸入稅を課し此れを積出すに又輸出稅を課す)今若し此の地に倉庫の如き銀行の如き商業の補助機關を設け一面江岸に貨物揚陸の設備を下さば所謂韓國の北門として土地の發達を見るを得べけんも居住民は皆對岸に通ずる大鐵橋の架設工事の着手するを待ち居るの有樣にて此等永久的土地繁榮策を講ずるもの無きが如く益々衰運に傾きつゝあるものゝ如し思ふに此の地は將來經濟上對岸安東縣の一部として經營するの方針に從ひ徒らに安東縣に競爭するが如きは不得策なるべし(未完)

●獨乙士官の入京

膠州灣にある獨乙陸軍士官九名は滿韓視察の爲め旅行中なりしが昨日入京する旨其筋に通牒ありたり

●內部警視の出張

既報の如く永田警視は十四日出發忠淸北道江原道地方の視察に赴きたるが岩井警視も咸鏡南北道に出張を命ぜられ本月廿日出發する筈往復約一ヶ月の豫定なり

●渡邊技師の上京

度支部臨時財源調査局技師渡邊彌吉氏は往復約一ヶ月の豫定にて東京に出張を命ぜられ來る廿三日出發す

●仁川副理事官

高木安太郎氏は御用により昨日入京せり

●新補充下士の赴任

今回補充の爲め到着せし憲兵下士三十四名は昨日山形高級副官の訓示を聞き本日各自任地に出發

●警部の任命

山口縣警部中田傳平木浦理事廳廳寺本十太郎の兩氏は今回韓國警部に任ぜられたるが共に地方勤務を命ぜらるゝ筈なり

●漢城病院の醫員聘用

漢城病院にては過般交迭の爲め耳鼻咽喉科及眼科醫缺員の處今回耳鼻咽喉科は京都大學より招聘することゝなり本日中に着任の筈なり又眼科醫は東京大學撰科卒業醫を交涉中の由

●補助憲兵の着衣

京城憲兵分隊附補助憲兵は昨日新被衣を着せり同時に各地方にも送着次第新被衣に改裝せらるべし

公人私人

▲今井潔氏(全州財務監督局事務官)は一昨日入京神野旅館投宿
▲倉本虎夫氏(第六師團二等主計)は一昨日入京錦尾旅館投宿
▲久保善太郎氏(同上)　同上
▲村田章一氏(海軍少尉)　入京中の所一昨日歸艦せり
▲向坂賢氏(海軍少軍醫)　同上
▲相田信吉氏(海軍機關中尉)　同上
▲內山曾一郎氏(統監府技師)　入京中の所一昨日馬山へ向け出發
▲中桐泰太郎氏(同上)　同大邱へ向け出發
▲小野是一郎氏(同上)　水原へ歸任
▲片山貞松氏(同上)　釜山へ向け出發
▲武島晉三郎氏(第六師團參謀大尉)　入京中の所一昨日出發せり

●近事片々

▲暴徒　鎭靜は聲のみ其實は今尚猖獗を極めつゝありとの報導頻々果して事實なりや
▲全羅　南部の如き益々猖獗の勢ありて[illegible]の交通と全く杜絕すとは事實か
▲果し　て事實ならば當局者は安閑と傍觀する時に非ず斷然たる處置を取るべき也
▲今街　歸順を說き懷柔をなすが如きことならば迂も亦甚だし斯ては際限ある可らず
▲何時　迄も暴徒政略に翻弄せらるゝは[illegible]可ならず須らく大鐵槌を下だすこそ肝要也
▲當局　の遣方常に緩慢に失するの嫌なきに非ず大掃討の時機は將さに熟しつゝあり
▲韓國　に於ける山伊兩系の暗鬪說は漸次昂騰し來れり事實ならば慮はしき事にて候
▲風說　の次第は山公は初より伊公の執る統監政治に慊らざるが一原因ならんと
▲山公　ば武斷政治を以て解決すべしとなす然るに伊公は何の渠等がと意地張り居る
▲長谷　川大將も曾禰副統監も伊公の政策を喜ばず事毎に伊公の說と合はざる觀有と
▲斯る　關係より益々互に反感を起し兎角に圓滑を缺ぐに至れる也と左る事實ありや
▲伊公　が辭意を飜へして專心韓國統治に從ふの決心を起したるも之が爲なりと云ふ
▲以上　の說は別として統監政治に對する不平の祖國の輿論たらんとする形勢ある也
▲惟ふ　に統監政治の優柔不斷の說は祖國國民の識認する所となりたるが爲ならん乎
▲韓國　本位韓人本位の政策は膨脹的國民の反對するは當然也當局者大に反省せよや
▲在留　邦人を重せざる海外政策は何れの邦國でも失敗せり失敗の印鑑歷々たるあり
▲官憲　本位韓國本位は帝國々民の輿論に反す帝國本位國民本位是ぞ帝國の輿論なり
▲露紙　ノーオヤウレーミヤ露士同盟論を主張せりと之れ實の對士策上一進步ならん
▲露士　同盟は獨墺以の拒む所ならん英佛は之に同意を表するならん是今後の大問題
▲紐育　ヘラルドは北京朝廷が米淸同盟を歡迎し居ると頻に怪氣燄を吐きつゝありと
▲如何　にヘラルドが狂畔すれば迚米淸同盟杯は大勢が許さず寔加減に斷悟すべき也
▲德川　家達公に東京市長たらんことを懇請するものあり之に對する公の答は面白し
▲市長　とは舊藩時代の町奉行なるものと同樣なりやと訪者恐縮して匆々に辭し去る

短篇小說

舊友（三）

青楓 作

二人が、大和町の村上の官舍に着いたのは、もう彼是十時過であつたらう、村田の妻の雪子と細田との一應の挨拶も濟んで、軈て三人は二階の八疊の間に鼎座した、

「君はあれから何うした、夫を聞かうじやないか」

先づ村上は口を開いた、

「ほんとで御座いますよ、妾は何時も貴君の噂を致して居りましたわ、どうかして一度御逢ひ申したいと思つて居りましたの」

「いゝえ、左樣ですか、奥さん村上は、駄々ッ子の弟を持つた積りで諦めて下さい」

「イヽエ、決して其樣なことどか」

やがて女中は、ビールを運ぶのであつた

「貴君、何の御馳走もありませんで、ほんの御酒だけですの」

「イヤ、何うか御構ひなく……」

「マア一杯飲まう、久し振じやな細田、飲み乍ら身の上話を緩くり聞かうよ、どうせ明日は休暇じやからな」

「僕も相變らず飲むよ」

「アヽ結構〳〵、男子須らく飲むべしだ」

「時に村上、僕は戀の爲に成功せんとして却て戀の爲に失敗を招いだ」

「それは又何う云ふ理由か」

村上は、手にせるチョコを膳の上に置いて細田の面を凝視める。

「先づ聞いて吳れ給へ、僕は戀は時には成功の母ともなるが、時にはまた墮落の導化線ともなると思ふよ、僕は僅かに此の二つの經驗を持つて居るのだ」

細田は、グイと飲み干して雪子に獻しのである。

「何辛く……アッ澄れますわ」

「君も知つて居るだらう、僕が早稻田文科の華を以て稱へられ、將來文壇の月桂冠は期せずして彼れ細田の頭上に在りとまで、持て囃された時代を、あの時、僕は或婦人とラブをして居たのであつた、而してラブの觀念は殆ど絶頂であつたから、其の愛の火の手の燃んなると同時に、自然其處に僕をして秀才たらしめたのであつた、即ち戀の爲に成功せんとしたのであつた、併し一度其の戀を破壞されてから、成程炎は一層熾んではあつたが、夫は純潔の愛火ではなく、呪ふべき嫉妬、詛合を呪ふ炎であつたのだ、實に僕は一變して自暴自棄の人間となつた、而して牢抵の學は成らず、人生の功も樹てずして、空しく三十の今日迄暮した譯さ、村田ッ人生に於ける僕の行路は、憐れ、失敗の跡を深く〳〵止めたのだ」

「アッハヽヽ、まア失戀の結果、厭世者となつたやうな次第さ」

「左樣か、それとは僕些少とも知らなかつたよ、僕は君が突然姿を隱したのに了解に苦しんだのだ、別に不成績な君でもないし、又酒色に耽る君でもないのに、如何した譯なんだらうと不思議でならなかつた、併し若しやよく詩人にあり勝な、失戀から來る厭世の爲ではあるまいかと思はぬでもなかつたが、細田に限つては……と思ふと丸で五里霧中に、彷徨て居た」

村上は、盃を細田に獻して

「失戀、左樣か、してラブした婦人とは一体何人だい」

「うら、あの藤枝嬢よ」

「あの吉葉さんの……」

雪子は、愕きの眼を夫に注ぐのであつた。

●白南信　統監と見誤たる

▲車夫の取違ひ

[illegible]る十二日長途の旅を終へて一行堂々と東の都に乘り込むや有志の歡迎實業家の招待は宛がら雨の如く今日は此所明日は彼所と旅舍の席暖まるに遑なき有樣燦爛たる日本の文華に驚いて突然度魂を抜かれし間抜の面魂も流石は創立委員といふ肩書の手前手に持つハンカチーフでソレと紛らはすも理り倘ほに絹帽にフロックコートといふ嚴めしき扮裝の上陸將を捨つて文華の咀嚼を裝ふとも何とて思ふ充分に祕臭き息を吐かるべきはあらじソレはさて右三十三名の一行が去る頃目黑なる日本麥酒會社の案内を受け之が設備の狀況及び工場の模樣等を參觀すべく同會社に赴しが例のシルクハットにフロックコートの堂々たる扮裝なりしかば路傍の人々は如何なる高貴の方々かなと怪みて振り返り見るものも少からざりしが中に全羅北道より撰出されし委員白南信の容貌が其の眼尻のデレりと下りて女好きらしき所から頭の禿げ工合將の疎な邊迄寸分伊藤公と異りなく殆んど瓜二ツともいふべきより滑稽にも白氏を輓ける車夫は統監なりと早合點し得意の色を滿へつゝいとも活潑に而も殷懃に麥酒會社迄輓き行きヤットト梶棒を蹈ろせし輓車夫先生心の中にては何程かのお思召を期しつゝありしが一向ソンナ氣配もなきより此れはシタリとそゝくさと上眼使で主人の顏を窃み見しに統監と思ひしは全くの誤り純然たる人間違なりしかば奴さん大に落膽しブツ〳〵陰言を云ひながら空ッ車の音も淋しく悄々と立ち去りたりとかヤツ以て近來の滑稽事といふべし

●日々社主催の伊東劇

朝鮮日々新聞社主催伊東劇の「十年後の京城」は去る十六日より開演の豫定なりしも一部の準備調はざりし爲め一日丈延期し一昨十七日午後六時開演せしが非常の大入にて八時頃に至りては早や札止めの有樣となれり何分藝題の珍奇にして破天荒なる所から一般觀客の眼を喜ばせたるはさもあるべきことなり殊に凡ての登場俳優が職心にもよく原本の呼吸を呑み込み巧みにコナせしは只管稼ぎの外なし伊東組の自働車伊東の宇佐川大將ナカ〳〵振ひ居れり

●四十男の妾狂ひ（二）

サテも川瀬某がれ高（春とありしは誤り）と關係を結びしは其の賢れ高の色香に迷ひしにあらでれ高が四百なり五百なりの小金を貯へ居れるを嗅ぎ付けたるより此奴一番口で丸めてフンダクつて遣らんといふ下心から斯くは妻子ある身の道ならぬ關係を結びたる譯なるが幸ひ女が自分の方寸通り言ふ事を聞き『れまはんの爲めなら……』と許りに心を許せしより男は案ずるより生むが易くマツ此の分ならばと女と相談して其の金を資本に前記の通り爰に魚商を營むに至りしが頓て月日の經つにつれて男は先きに女に對して慾心得で掛りし冷酷な心根はいつしか消え去り今は女の情の絆にはだされて水も漏さぬ間とはなりけるとぞ是非なき仕譯と言ふべけれ、斯くて男は女と共に商賣大事に勉强せし甲斐ありて今は相當に得意も殖ね從て店も却々に繁昌し行きしが取り分け女の働きは一方ならず現に憲兵隊への賣込の如きは女の世辭一ツで御用を仰せ付けるゝに至りたる程なれば男も今は女の手腕者なるに心から敬服して了ひ此の女なら末の末迄添ひ遂ぐる甲斐ありとソレよりはます〳〵商賣に身を入るゝ事とはなりたり

話し變はつて台灣に在る川瀬の妻は夫が今より三年以前朝鮮に出稼すると言ひ殘して家を出でしまゝ其後何の音沙汰もなくソレに二人の子迄後に殘しあるを承知の身ながら只の一錢も仕送りなきより纖弱き女の身の何の詮術もなく從つて日々の暮し向も追々と困難に陷り行くのみなるより今は如何にしても夫の傍に赴く外他に方策なきに至りしがソレにしても夫の行衞の只朝鮮とばかりにては探ねるに由なく女心のさま〴〵と胸を痛めたりしが其の中朝鮮より歸りし或る人の話しに夫は京城の大和町とやらに世帶を持ち若き女を妻に迎ゐて魚商を營めるとかのことを耳にしたれば女房は喜びの中にも口惜し涙が先に立ち薄情男よ因業の夫よと觸神の袖を嚙みしめながら二人の子を前に泣いて打ち嘆きしが併し斯く所在の分りし上からは何時迄も斯くわりとて詮なき事と頃ての心の臍を固むると近所隣りの者にも暇乞ひし二人の子を引き連れて京城に來り大和町なる夫の家に乘り込みしはツイ去る十日の夕刻なりき

紹介欄の開設

中込規定

一、希望者は住所氏名を詳記し本社營業部宛にて申込むべし但し氏名住所掲載を求むる場合は特に其旨を原稿に附記することを要す

二、申込事項は交際婚姻養子縁組雇人並に雇入等諸般の人事又は土地建物其他諸般物件の賣買貸借等の希望に限る

三、掲載行數は五號活字十九字詰三行以内にて參回を超へざる範圍内に止む

右は世間の御便宜を計るの趣意より無料にて本紙廣告欄に掲載可申候に付何人にても御遠慮無く本社へ御申込有之べく候

尚本社は調査部を新設し財産及信用等諸般の調査事項の委託に應ず

九月　京城新聞社

●身分に耻ざるか

一昨年日韓協約に依り韓國裁判所に日本人の判官を任用することとなりしより日本人判官は續々渡來して夫々任命されたるが中に中島某といふも他の人々と共に來京し不知火旅館を假の宿として止宿し居りしが間もなく水原裁判所詰を命ぜられ彼地に赴任するに就ては下女も入用なればとて同館の主人に相談せしに主人は同館の仲居たる福岡縣生れにて何のヨシといふを撰び周旋せしに某は大に喜びれヨシを伴ひ水原に赴任したるが旅寢の寂しさに何時しか二人は怪しき中となりれヨシの腹には因果の種さへ宿り流行の韓妻ならぬ日本妻と産み落したるは花の樣な女の子なりかば二人は大に喜び手の中の玉と愛しみしもれヨシは産後の惱み面白からざれば一應日本に歸りて療養せんと中島に仔細を語りて一時の暇を貰ひ日本內地へと歸りたるは同三月の頃なりし夫より內地にて種々療養せし甲斐ありて六月再び當地に來り元の主人たりし不知火館に至り中島のことを聞けば中島は既に水原には居らず當地の裁判所に轉じ居れりと聞き早速其住宅なる南山本願寺の下なる三軒長屋に至り見しにコワ如何に同家には既にれクマとかいふ女が奥樣然として長火鉢を前に陣取り居るに一時は呆れて物も出ざりしに漸く氣を取直し中島さんも中島さんだ例令韓妻にしても子まで出來た中を一時暇を乞ふて歸國したりとて間もなく其跡に外の女を入るゝとは餘り無情き致し方と恨み子供を返せと談判せしもれクマは空嘯きながら子供は他家に預けてあれば此家に居ないと云ひ捨て烟管をポンと叩きたる面憎さにれヨシは大に怒り此阿魔めがとれクマの胸倉を取りて小突き廻し此に大立廻りを初めたることもありて今にゴタ〳〵れヨシは胸の黑雲晴れず中島の薄情を恨み居れりとのことなるが如何に冷部が商賣柄だとて身分もある者が斯る始末は餘り褒めたことにあらずとの投書ありたり

●家賃不拂ひの訴へ

北署苑洞九十三統四戶前教官崔永喜は一ケ月三圓十錢の家賃にて山林洞金桂弘の家を借りて住みながら其家賃を支拂はざるにぞ兩人同道して觀察分署に出頭して右の裁斷を仰ぎたれば警官は本月末日までに乾度支拂ふべき旨說諭を加へ引取らしめたり

●僞造一銀券行使

江華島沙谷面居住李憲宰（三十）といふ韓人は去る十五日以來西署社稷洞三十一統十一戶慶健秀（二十）といふ友人の宅に投宿し居れるが憲宰は昨日午後十時頃鐵路電氣會社に至り五圓の第一銀行劵を出し銀貨と兩換せんことを請ひたれば會社にては之を見て僞造にはあらずやと疑ひ第一銀行に電話にて問合せたるに同行にては早速之を取調べしに疑ふ方もなき僞造紙幣なりしにぞ本町派出所に斯くと訴へ出でなれば直ちに兩人を取押へ目下取調べ中なりと云ふ

●若しありとすれば怪しからん

龍山靑坡病院は此頃夜間の宿直は一名の男と四名の看護婦某々等詰切り居れるが夜間十時頃になると殆んど每夜の如く聲高々と薄暗き院内を彼方此方と驅け廻り實に見苦しき醜態を演じ病床に苦悶せる患者等の安靜を妨げるのみならず看護を怠り病者をして益々重態に陷らしめ居れりとの投書ありしがまさか其樣なこともあるまいが若しありとすれば怪しからぬことならずや

●照會方の注意

紹介欄の事項に對し照會を求めらるゝ方にして往々匿名を用ひる向あるも元來自己の名を明かにせずして他人の名を騙るなどは非禮の譏を免かれざるのみならず返書を差支へる事もあれば此等は一切沒書に附するより外なく又婚姻紹介に就て手續等を問合せらるゝ人あるが右は全く當事者の協定すべきものなれば本社は唯だ好意的に其希望を紹介するに過ぎず紹介にして返信を要する場合は以て相當郵劵を封入ありたきものなり

●白露吟社例會

白露吟社同人は本日午後七時より和城臺二十九號官舍中方にて例會を開催する由なるが同好の士は何人にても出席するを得るとの事なり尙ほ會費は無料なれば斯道に趣味を有する人々は同會に赴き時節柄一句をものするも亦興味深かるべし

●土曜說敎

本日午後八時より龍山本願寺に於て伊藤開敎使の說敎ある由

●南山本願寺說敎

本日は土曜日に付例の通り本願寺に說敎あり

●膓窒扶斯

京城櫻井町六十一番戶山本爲次郎（六十）は十六日膓窒扶斯に罹り大韓醫院に入院

●歌舞伎座の松風村雨

歌舞伎座の伊東文夫一座本日の藝題は「松風村雨」にして嶄新なる懸賞法を設け各役の穴探しを催す由なれば嘸かし賑合ふなるべし重なる役割は左の如し

友八矢田問一（伊東）樋川下女れつる、柴田妻ます子（伊藤）樋川の妻後に北浦の妻幸子（桂）藝妓小松や美代次、后に樋川の妻美代子（吉野）幸子の父柴田彌之助、露の者八五郞（芳川）媒酌人野村承平、下男作藏（中村）一子須磨子（桐之助）露の者吉藏、院長靑山博士（山路）女髮結れ琴、大阪同盟銀行員北浦乙哉（小泉）理學博士栗原明（酒本）北浦の母律子（北新）從姉大山絹子（美咲）理學士樋川昌之（敷島）大阪聯合紡績會社長浪川理一郞（杉浦）

●壽座本晩の藝題

同座本晩の藝題は「二人名と旗下」全七まくにして場割役割は左の如し

場割

水消寺、園部の宅、祖師堂森元の病室、園部の貸家、口入屋、太郞稻荷前、花月大廣間、同小座敷、赤阪見附、北海道エトロフ島、松吉の宅、上野山內、森元家大廣間

重なる配役

森元夫人鶴子（野村君子）藝妓太田（石井）乳母のれつね（花井しげ子）園部菊子（高尾）森元子爵（內藤）森田卯れたい（植田）安藤保之進（松村）星川新造（富士井）金井彌之助（坂本）家令安藤保之（寺田）福本憲一郞後に海軍少尉、藝妓松吉（木村）

講談
西山茶話 衣川 桃川燕光

水戸黄門光圀卿は、徳川左衛門督頼房公の第三子、幼名長丸、後千代松君と申上げました、御幼年の頃から聰明叡智に渡らせられまして、長して水戸の御家督を繼ぎ、左衛門督光圀。當時會津の麒麟、水戸の鳳凰といはれた位ひ、又勤王無二の御方にて、大日本史を御編輯になりました。されば後に常盤神社で神に祀られました。御隠居を遊ばす時に

位山登りて辛き老の坂
鷲の里ぞ住みよかりける

と一首の和歌を詠ばした、常陸國太田の西山に隠庵を出來て是へ住はれ、當時綱吉公から一萬石の御隠居料を差上げました。處が是を固く御辭退を申し、隠居とは隠れ居る。世を捨て、又世に捨てられた光圀へ一萬石は過分、五百石の地形を隠居料に呉れるやう。殘る九千五百石は三十五萬石の領分、人民へ之を頒ち與へ、年貢苛役を緩め下々を勞はり呉れるやうとこふ、誠に結構な仰せでござります。ソコで月に一回づゝ山邊主水正、御隠宅へ御機嫌伺ひに參ります。或一日來て見ると御隠居は今野良仕事に行つたといふ。主水取敢ず畑へ來て見ると、尻ッきりの野半纏、縫ぎたらけの股引、三尺帶をお締め遊ばし、汚ない手拭で頰被り、自分で鋤を取つて畑を耕やして居る。三位の中納言で日々御登城を遊ばし天下の政務をお聞き遊ばした昔のお姿はトンとございません。實に主水正も恐縮の体で、主「恐れながら麗はしき御顔を拜し、恐悦に存じ奉つりまする。江戸表館樣益々御機嫌克う御座あらせられまするゆゑ御心安く思召し下さるやう」西「オ、主水か、能く來やつた。御苦勞である。サア〳〵是へ、屋形樣御機嫌が宜いといふを承はり何より隠居は喜こびである。只今一ぷくいたさうと思ふ處、幸はひ其方も一ぷくしやれ」と傍はらの木の根に腰を掛け、粗末の地切りの烟草、眞鍮の烟管を出して、ガチリ火を付け、一ぷく吸つて火玉を手の掌へ叩き、西「サア主水、其方も一ぷくどうぢや」と手を前へ出した、主水正は只恐れ入つて 主「ハヽッ、恐れ入ります」西「イヤ何も恐れ入る處はない。一ぷくいたせ」主「ハッ、能く下情に馴れさせられ、主水恐れ入りました」西「コレ〳〵主水、其方のやうに恐れ入つて居ると此方が恐れ入つて了ふ、早くいたせ、モウ熱くつて堪らん……」と手の掌で火の玉を轉がして居る 西「時に私の手作りの芋を館へ參らしたい。其方迷惑ながら持つて行つて呉れ」と隠居手作りの芋を澤山に下すつた、ソコで主水正が御城内へ持歸つて、此處から葵御紋の付いた長持へ入れ、江戸表へお差送りになる。

●新聞料 一枚金二錢▲一ヶ月前金卅五錢▲三ヶ月前金壹圓▲六ヶ月前金貳圓▲郵税一ヶ月金拾錢
●廣告料 ▲五號活字十九字詰一行一回四十錢▲四號活字十九字詰一行金五十錢▲特別
發行兼編輯人 秋山忠三郎
印刷人 高木久馬太
發行所 京城西署西小門通 京城新聞社 電話六六三番